

令和 4 年 5 月 20 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）

研究期間：2018～2021

課題番号：18KT0005

研究課題名（和文）先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究

研究課題名（英文）Cross-boundary Studies of Rethinking of Global Studies from the Indigenous people's points of view

研究代表者

池田 光穂（Ikeda, Mitsuho）

大阪大学・COデザインセンター・名誉教授

研究者番号：40211718

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,500,000円

研究成果の概要（和文）：世界の先住民が取り組んでいる、遺骨副葬品返還要求、博物館における文化提示への改善要求、言語と文化教育への要請という現象を調査研究した。その結果、世界の先住民運動は、ICTなどの共通のコミュニケーションツールを用いながらも、グローバル化は、決して世界の均質化を引き起さず、むしろ文化の多様性の尊重と独自性に関する歴史的反省を全世界に発信している実態が明らかになった。国民国家は領域内の先住民のグローバルなネットワーク化を支援し、かつ、先住民と国家との連携や和解にむけて動く責務があり、また公教育の中に先住民学を組み込んで、言語と文化の多様性を担保する必要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的意義は、グローバル・スタディーズの従来の学問的姿勢を批判し、この枠組を近代の普遍化の発想からではなく、先住民という周辺からの声や眼差しに応える理論的成果を出したことにある。先住民言語教育運動や、遺骨や副葬品等の返還運動のグローバルな現状と課題を明らかにした。先住民をエージェンシーと捉えることにより、実践者としての研究者と先住民との研究倫理の枠組みを変化させ、それが何であるかを具体的に示した。その社会的意義は、新しい「先住民学」の教育の場をデザインできるような知識基盤コミュニティの構築について構想し、その具体的な提案を示すことができたことにある。

研究成果の概要（英文）：The social trends of the demand for the return of burial remains, the demand for improved cultural presentation in museums, and the demand for language and cultural education, all of which are being addressed by indigenous peoples around the world, were investigated. The results revealed the reality that the world's indigenous movements, while using common communication tools such as ICT, globalization has never caused homogenization of the world, but rather has transmitted to the entire world historical reflections on respect for cultural diversity and uniqueness. It is clear that nation-states have a responsibility to support the global networking of indigenous peoples in their territories and to work toward cooperation and reconciliation between indigenous peoples and nations. It is necessary to incorporate indigenous studies into public education to ensure linguistic and cultural diversity.

研究分野：文化人類学

キーワード：先住民 博物館 言語文化復興運動 先住民教育 遺骨副葬品返還運動 先住民学 ポストコロニアリズム ELSI

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

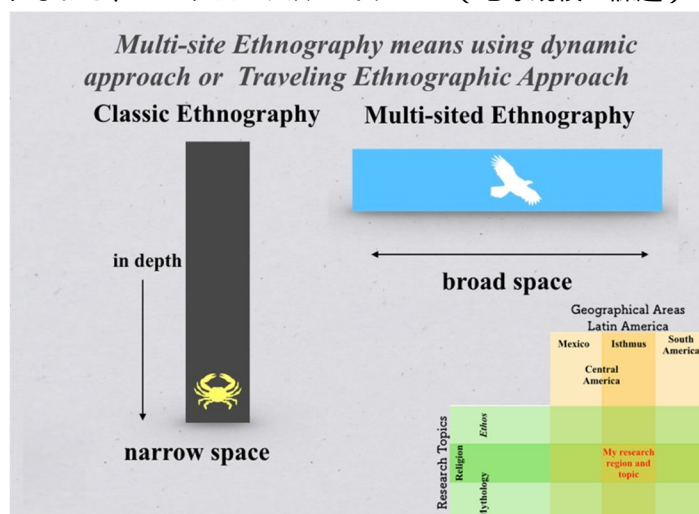
1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の出発点におけるその社会的文脈

日本学術振興会が時限付き(2016-2018年度)で公募テーマを設けた「グローバル・スタディーズ」という研究枠組みがあった。グローバル・スタディーズは、世界の社会文化経済政治現象の要素が連結と相互影響という依存状況を生み出していることに着目し、今後世界がどのように再編構造化されるのかを分析する研究視座をもつ。この分析においてしばしば等閑視されるのが先住民の存在である。なぜか?それは、世界的現象が地域の先住民に与える影響は多かれ少なかれ同化現象に巻き込まれ、先住民や民族的少数派の苛烈な抵抗が仮にあっても中央政府により鎮圧、やがて包摂されるだろうと予測するからである。文化人類学者は、先住民の消滅しつつある伝統文化をサルベージ手法を用いて静態的に記述し擲い上げようとするか、あるいは、同化現象のなかにおける適応と抵抗と言った動態的テーマを研究する。しかしながら、先住民主体の側から見れば、ポスト国民国家という流れの中で、これまでの西洋世界ないしは中枢がもたらした植民地拡張を終焉させるための脱植民地化の努力をしているのは世界の先住民であり、その運動は21世紀の四半世紀を迎えようとする現在でも継続している。そのために、私たちは、本研究課題に応募することで、閑却視されがちな、世界の先住民の視座や立場を通して、グローバル・スタディーズの再考を促すことができると考えた。

(2) 本研究課題におけるグローバル・イシュー(地球規模の課題)

この特設分野研究の公募課題には、グローバルな現象を分析考察するだけでなく、その現象に伏在するグローバル・イシュー(GI,地球規模の課題)の析出と、その解決に向けての取組が必要であることが示唆されている。そのために、この問題に本研究課題はどのように取り組むのか研究班は協議をおこなった。その結果、次のような手続き(プロトコル)について合意を得た。すなわち、1.グローバル・イシュー(地球規模の課題)と呼ばれる課題がある。2.それらは



「移民や難民あるいは環境問題(environmental issue)」に代表されるように地球上のさまざまなところで生起している「問題」である。3.それらの問題は、その発生メカニズムが解明されれば、その難題は将来において解決される可能性がある。4.学際的な取り組みは、それらの問題解決のためのアプローチ方法のひとつである。5. 私たちが直面している課題には2つの相異なるモーメントがある。それは(A)個別地域の固有性に密着して考えること一図の縦方向のモーメント、ならびに(B)地域横断的に探求する必要性一図の横方向のモーメント、がある。6.

実践的目標としては、普遍性や一般化を模索することと、つながりを求めて個別に密着することが矛盾することなく連結すること。そして、最後に、7.その実践目標をもって、個々の対象や場所への熱い思いと、つながりを希求してそこから飛び立つ決断が必要であると思われた。

2. 研究の目的

(1) 先住民が直面するグローバル・イシューの析出

グローバル・スタディーズ(GS)またはグローバル・アフェアーズ(GA)とは、グローバルなマクロプロセスに関する学際的な研究である。その研究パダライムは、グローバルな政治研究(国際政治学)マクロ経済学、国際法、生態学、地理学、地質学、文化研究、社会学、人類学、民族学などが含まれる。先住民が抱えるGIのテーマは、国連の持続可能な開発目標(SDGs)に対応する以下のような課題が考えられるだろう。すなわち、貧困、飢餓と栄養、ライフスタイルと健康、先住民教育、ジェンダー平等の課題、先住民地域での安全な水供給(水源地の環境保全を含む)、エネルギー問題(天然資源採掘やそれによる水質汚染や核汚染を含む[10] 文献番号以下同様)労働経済問題、持続的開発技術、政治的参加とその権利、急速な人口集中と都市化、気候変動と環境問題、居住地域周辺の天然資源管理、紛争解決とガバナンス、多様性の保証と多文化主義などである。このようにGIは多岐にわたるので、研究班を組織した上で、それらの中から、取り組むべき重要な課題を選び出す必要があった。

(2) グローバル・イシュー課題から抽出される理論的課題の提示

研究班の組織メンバーが専門とする学問分野(具体的には、文化人類学[1][2]、社会人類学[7]、

先史考古学[5][8]、生物人類学[3]、言語学[9]、博物館学[6]、政治学[4]、など)が、上掲(1)から選ばれた複数の課題の解決において案出した、あるいは、先行する研究から得られる理論用語や概念を示し、グローバル・イシュー(GI)の解決に向けた理論的貢献をめざす。

3. 研究の方法

(1)先住民が直面するグローバル・イシュー(GI)の析出における3つの課題

上掲の目的リストを踏まえて、本研究課題は、先住民の、(a)遺骨や副葬品等の返還運動、(b)文化復興運動、(c)先住民言語教育運動、の3つの活動に着目し、先住民の視点から「名指す」行為が、従来のグローバル・スタディーズがもつ先住民像に反省と変更をもたらすという仮説を検証する。その具体的な方法としては、文献検討、フィールドワーク、そして共同研究会による意見交換であった。

(2)課題から抽出される理論的課題の提示

研究班の組織メンバーが専門とする学問分野、具体的には、文化人類学、先史考古学、生物人類学、言語学、博物館学、政治学、先住民文化研究などの観点から、上掲の3つの課題に取り組んだ。そして、課題の解決において案出した、あるいは、先行する研究から得られる理論用語や概念を示し、グローバル・イシューの解決に向けた理論的貢献を試みた。その方法としては、文献検討、共同研究会の開催、そして、国内・国外の学会発表による意見交換である。

4. 研究成果

(1)先住民が直面するグローバル・イシューの3つの課題の現状把握：(a)遺骨や副葬品等の返還運動

2018年12月に京都地裁に提訴された琉球民族遺骨返還請求訴訟に私たち(池田・太田・瀬口・辻・加藤)は関心をもち、そのおよそ2019年夏以降メンバーの一部は支援者ないしは参与者になった。2019年11月のバンクーバーでのアメリカ人類学連合大会では、研究分担者の太田[2]、ならびに瀬口[3]が主催し発表した分科会の発表者として、池田[1]は琉球とアイヌへの遺骨の返還にまつわる研究倫理の問題について論じた。また山崎[6]も同学会において北米におけるアイヌ収蔵品に関する新しい研究ネットワークの提言をおこなった。2020年4月からは日本学術振興会科学研究費補助金・基盤(A)「先住民研究形成に向けた人類学と批判的社会運動を連携する理論の構築」(代表者：太田)のもとで、原告団団長の松島泰勝とともに共同研究者になるという機会を得ている。同裁判は2022年4月に請求棄却の判決が出て原告は上告の手続きに入っており、今後も継続される。この運動を解明するために池田らはインターネットのウェブページを作ってきた。すなわち「金関丈夫と琉球の人骨について」「琉球遺骨返還運動にみる倫理的・法的・社会的連累」「遺骨や副葬品を取り戻しつつある先住民のための試論」「霊性と物質性：アイヌと琉球の遺骨副葬品返還運動から」「篠田謙一博士の研究ために人骨資料が必要」という修辭の分析」「琉球コロニアリズム」などである。またアイヌについては、「アイヌ遺骨等返還の手続きについて考えるページ」「個人が特定されないアイヌ遺骨等の地域返還手続きに関するガイドライン(案)」「先住民遺骨副葬品返還の研究倫理」「アイヌ遺骨等返還の研究倫理」「遺骨は自らの帰還を訴えることができるのか?」「アイヌとシサムための文化略奪史入門」「遺骨はすべからず返還すべし」などである。このような作業を通して、以下のことが明らかになった。まず、人類が長い間に培ってきた、頭骨にもつ複雑な宗教的あるいは物神崇拜(フェティシズム)の驚きべき多様性と複雑さ。それは首刈り習俗から今日の犯罪集団における見せしめの首級まで多岐にわたる。先住民の合意抜きの人類進化を探るために頭骨の計測やDNAの採取というものは、先住民からみれば、マルセル・モースとアンリ・ウベールが『呪術の一般理論の素描』で表現したように、まさに「科学になりそこなった科学」であり、その科学性の喪失は、先住民が指摘するところの「倫理観の欠如」に他ならない。日本の一部の人類学者は、返還すると人骨研究はできなくなると危惧するが、瀬口[3]は北米のNAGPRAによる返還は研究を阻止したわけではなく、この分野の脱植民地化を進めている面があることを明らかにし、その成果を北米の生物人類学会等で報告している。

(2)先住民が直面するグローバル・イシューの3つの課題の現状把握：(b)博物館を中心とした文化復興運動

世界の先住民遺骨返還運動の歴史を学んだ人にとっては、日本における博物館や大学、研究機関にある先住民遺骨と副葬品の返還の不履行の現状や先住民文化の展示は、諸外国にそれに比べて驚くべきほど遅れている[8]。自分やその親族の遺骨や彼らが制作した伝統工芸品が標本になることはないという研究する側の「無感動」の構造というものが、先住民遺骨返還運動と一般の市井の人たちのあいだを分断していると思われる。その流れに抗して、世界の先住民の人たちが博物館や大学、研究機関にある同胞の先祖の遺骨や副葬品をふるさとに奪還し、祖先から伝わったやり方で供養する要求をしていることは、上掲(1)で述べた。このような動きに専門家は無関心で何もしてこなかったわけではない。展示をめぐる政治学や文化を表象する権利についてこの半世紀にわたって議論が重ねられてきた。山崎[6]は博物館展示に参画したことのあるアイヌ工芸作家や、観光地での土産物制作に携わる人たちと対話をおこない、良好なる関係性の再構

築を試みてきた。すなわち、博物館に収蔵されている作品を、その末裔の工芸家に直接手に触れて解析してもらい、研究者はそれに対する基礎資料を準備したり、対話記録を取り、さらにその現場で生じる疑義を研究者は調査をし、工芸家にフィードバックする。研究者はそのプロセスを再構成して、映像化したり図式化したりして、工芸家の許諾を得て、博物館に追加展示して、来館者に対して先住民文化への敬意と反省的な意識をもたらしことを手助けする。工芸意匠の変化や観光市場での消費者の興味変化などに関する歴史研究とその展示を通して、事物の来歴に対する来館者への情報提供を高める。そのことを通して、先住民がポストコロニアルな状況の中でどのように生き、また制作された工芸品や土産物といった事物に「いのち」があることを、先住民自身が指摘している。關[5]は、博物館をめぐる先住民の態度におけるエクアドルとペルーの事例を比較して、前者では口頭伝承や先住民運動などの無形遺産に、後者は有形遺産への関心が高いことを指摘した。

(3)先住民が直面するグローバル・イシューの3つの課題の現状把握：(c)先住民言語教育運動

丹菊[9]は継続してアイヌ語の記述言語学と言語と文化について研究をおこなった。記述言語学は久しく先住民に対するガバナンスの学術的道具として使われてきた。アイヌに対する言語教育は、教科書が編纂され、それを使ってアイヌがアイヌ語教室等で同胞に教育することで言語復興が緩やかに進展してきた。先住民言語の再活性化には、話者の増加、言語地位の向上、言語の正常化が必要である。和人を含めた話者の増加が見込めても、言語地位の向上なくして再活性化は偏ったものになるからである。言語教育は地域政治の課題になるが、行政にはその意識が希薄である。池田[1]や太田[2]の研究対象地域であるグアテマラではマヤ諸語の復興がさかんであるが、それには国家政策そのものが多文化、多言語、多民族を前提とするという主張が繰り返されてようやく軌道に乗った。スペイン語に対してマヤ語の言語地位が相対的に低いからである。伝統文化に対する忌避感情を押しとどめ、文化のプライドを取り戻すために、かつての植民地主義に加担した言語記録を基に、語彙の復元や、新しい生活様式に使えるための新語創案(ネオロジズム)が試みられた。石垣[7]が専門とする台湾原住民(先住民)では、政府は一貫して、族語教育、部落学校、実験学校教育を通して、言語主権や文化主権の回復を試みている。このような試みは、北米を事例にして多文化主義の規範理論を検討している辻[4]によると、3つの異なったアプローチとして解析されている。第一の選択肢は「支配・抑圧アプローチ」では植民地化の不正義に対してラディカルに名誉回復する処方である。他方、二番目の「文化アプローチ」は言語復興運動や政策に用いられ、三番目の「コミュニティ再建アプローチ」は社会病理の政策に使われる。辻の議論によると、先住民に対する言語や文化の復興は、文化アプローチだけに傾斜すると、支配・抑圧アプローチを採用する運動当事者の協力が得られず、また政府に対しては、文化アプローチにコミュニティ再建アプローチの要素を加味せずして、効果的な多文化主義による理想的な政策は望めない。私たちの研究成果は、辻の理論的予測にほぼ符合しているとみることができる。

上掲の3つの現状、すなわち(a)遺骨や副葬品等の返還運動、(b)博物館を中心とした文化復興運動、そして(c)先住民言語教育運動、の現状への理解と解釈をとおして、本研究グループは次のような結論を得た。グローバル・スタディーズは、先住民に着目することで、この地球上の主権回復運動のなかには、さまざまなトランスナショナルリティに関する現象の自覚を促し、これまでのグローバル・スタディーズに今後更なる再考を促すことになるだろう。

(4)主権回復運動のトランスナショナルリティ 01：文化研究/地域研究の枠組の変化

地域研究は、地域に関する基礎的なデータ収集と、それぞれの研究テーマの地域間比較により、グローバルな連関関係を描写することに貢献する(先の図を参照)。第二次大戦前の地域研究は、文明の進歩あるいはオリエンタリズムに基づいて促進されたが、第二次大戦後におとずれた冷戦により、地域研究は文化や民族単位の研究から国別単位にまとめられCIAに代表されるような国際的な地政学的ガバナンスのための基幹学問に変貌した。先住民や周辺少数民族は中央政府との政治的力学を編成する要因に格下げされ、それまで蓄積されてきた人類学的な民族誌研究は、選挙行動や地域の権力行動を分析する際の政治学研究に主力が移っていった。しかし、冷戦構造の終焉、和平交渉の進展などにより、かつての先住民の民族誌的知見は、先住民の言語や文化の復興のための基礎資料として再び活用されるようになった。先住民という視点をグローバル・スタディーズに呼び戻すことで、文化的・民族的・言語的多様性にもとづき国家を再建しようとする動きに、ポジティブな影響を与えることになるだろう。

(5)主権回復運動のトランスナショナルリティ 02：先住民学の創造と普及

先に、先住民という視点をグローバル・スタディーズに導入することで、文化的・民族的・言語的多様性にもとづき国家を再建しようとする動きに、ポジティブな影響を与えるという予測をおこなった。それまでの植民国家の先住民政策の基本は、先住民や周辺少数民族を国家に包摂するために、文化的・民族的・言語的多様性を蹂躪した同化主義政策にあった。だが、文化的・民族的・言語的多様性を保持するためのこれからの国民国家の課題は、従来の同化主義路線を180度転換し、文化的・民族的・言語的多様性を尊重し同時に国民国家の中に包摂することが中心課題になるはずだ。そのための教育は重要な手段になる。奨学金制度の充実を通して、先住民

のための、先住民による、先住民の学問の確立が急務である。私たちは、世界の先住民学のコースやカリキュラムを調査して、モデルカリキュラムの試案をこれまで作成してきた。加藤、山崎、丹菊[8,6,9]が関わるプログラムには、2022年から北海道大学大学院文学研究科で開講されるアイヌ・先住民学のコースワークが提案、実施されている。

(6)主権回復運動のトランスナショナリティ 03：ポストコロニアリティ意識の覚醒

ポストという言葉は、時間的経過の概念としての「植民地後の～」が含まれているが、それ以外にもさまざまな意味が含まれる。すなわち、植民地後の独立、主権/主体の確立、植民地状況が終わった、植民地状況を脱却した/しようとするなどの意味の派生などである。ポストコロニアルという用語を意識的に使う理由は、この語がそれぞれの当事者により多義的な展開をするからである。すなわち、(a)植民地状況や支配が終わった後の秩序や世界のことを意味すると同時に、ポストという時間性を引き受けて、(b)コロニアル植民地状況や条件、あるいは支配の形態が現在もなお引き続き存続している、批判概念としても機能する。グローバル・スタディーズの研究対象たる世界の先住民の不満とは、この地球上にコロニアル状況を脱却した状態があると同時にコロニアルな支配がいまなお廃絶されていないことである。その不満にさらなる拍車をかけるのが、研究の枠組みにおいても、デコロニアル研究者がコロニアル状況にある被調査者を調べるという枠組みは今なお続いていることである。前項(5)の先住民学はそのような事柄に反省を促し、その解決にむけてさまざまな処方せんを模索する意義がある。

(7)主権回復運動のトランスナショナリティ 04：先住民文芸復興

かつてのアイヌ語研究のインフォーマントたちが口承文芸の伝達者であると同時に、日本語においても優れた詩人であり歌人であり、達意の文章家でもあった。かれらの文芸家としての評価は、アイヌ語ではインフォーマント、そして日本語においては先住民文学作家と、分断=分裂されている。先住民-文学と連辞符が連結することによるそれぞれのジャンルの囲い込みがある。これはアイヌの政治文化経済状況を描く事以外のものには居場所を見出されないという文芸ジャンル上のアパルトヘイトであると言っても過言ではない。そのようなジャンル分けに抵抗するひとつのあり方としては、丹菊が指摘するように、世界文学一どのような文学も作者と登場人物の固有性や個別性から出発するからである—として先住民文芸をふくめて芸術表象を捉えようとする動きがある。世界文学というアーリーななかでディアスポラも含めて場所を異なる世界の先住民たちが共通した意識を持つことができる芸術空間を創出しているのである。先住民文学という存在をグローバル・スタディーズの中に位置づけた時に、固有の局所化した物語(ナラティブ)が、普遍的な問題に直接接続するという新たな可能性を私たちに教えてくれる。

(8)主権回復運動のトランスナショナリティ 05：先住民を包摂した歴史認識の誕生

先の(6)ポストコロニアリティ意識の覚醒で述べたような先住民の主権意識の回復という過程は、抽象的な想像上のものではない。遺骨や副葬品の返還運動、あるいは(2)の博物館のなかでの学芸員や専門家と先住民の間を民族表象を媒介とした対話のやり取りのなかで意識化される具体的なものである。この意識化とは、パウロ・フレイレがブラジルでの成人への識字教育のプロセスのなかで、学校の知識だけを断片的に生徒に与えてゆく銀行型の教育を批判し、人間の相互理解に基づく対話的な学習行動誘うときに生じる成人のなかに生まれるものに相似する。先住民がポストコロニアリティを意識化するためには、もはや20世紀に隆盛を極めた階級闘争やプロレタリアートの自覚を経由せずとも、未だコロニアル状況が続いている状況を自覚し、そのことを外部の人びとに「名指す」—この用語は太田による—ことにより変わりうるのである。先住民によるこの具体的な名指し行為に世界の人びとが応答したときに、これまで当たり前として思われてきた歴史の理解に対して揺らぎがおこり、歴史主体の多元化に関する議論が開始されるだろう。以上、いずれの観点も、主権回復運動のトランスナショナリティ意識に関わることであり、先住民という要素をグローバル・スタディーズが取り込んだ時に生じる新たな可能性であることが検証された。

参照文献

- [1]池田『暴力の政治民族誌』大阪大学出版,2020. [2]太田「先住民民族運動」『ラテンアメリカ文化事典』丸善,2021. [3]Seguchi (2020) *WOS:000513288903032*. [4]辻「マイノリティ言語の地位をめぐる考察」『北大法学論集』74-6,2021. [5]關監修『アンデス文明ハンドブック』臨川,2022. [6]山崎『もっと知りたいアイヌの美術』東京芸術,2022. [7]石垣「現代台湾における原住民族教育政策」『台湾原住民族研究』24,2020. [8]加藤編『いま学ぶアイヌ民族の歴史』山川,2018. [9]丹菊『アイヌ韻文の朗唱法』北海道大学,2022. [10]細川「権利と回復への長い道のり」『環境と公害』50,2020.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計51件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 Ikeda, M.	4. 巻 7
2. 論文標題 Repatriation of human remains and burial materials of Indigenous peoples: Who owns cultural heritage and dignity ?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CO*Design	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 8
2. 論文標題 軍事的インテリジェンスの人類学の射程と倫理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CO*Design	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上大介、額田有美、池田光穂	4. 巻 1433
2. 論文標題 医療人類学からみたCOVID-19対策の現在：メキシコ、中米、パナマを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ時報	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂、井上大介	4. 巻 9
2. 論文標題 サイバーパンクに倫理は可能か？：新しいネットワーク心性としてのサイバーパンクの人類学的研究序説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CO*Design	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中川義信、中岡成文、西村高宏、池田光穂, 司会：山中浩司	4. 巻 31(2)
2. 論文標題 生きるための社会デザインを考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中岡成文、西村高宏、司会：池田光穂	4. 巻 31(2)
2. 論文標題 哲学カフェとコミュニケーションデザイン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 SP3
2. 論文標題 自然学論集：文化人類学の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 C0*Design	6. 最初と最後の頁 1-573
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎幸治	4. 巻 813
2. 論文標題 アイヌの生活用具について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民藝	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Seguchi, N.	4. 巻 171
2. 論文標題 Program of the 89th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 American Journal of Physical Anthropology	6. 最初と最後の頁 1~321
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/ajpa.24023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 71-6
2. 論文標題 マイノリティ言語の地位をめぐる考察：リベラル多文化主義の有効性をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北大法学論集	6. 最初と最後の頁 57-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 3468
2. 論文標題 書評：「ヨーロッパに生きるムスリムの統合の可能性：安達智史『再帰的近代のアイデンティティ論』(晃洋書房、2020年)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 20
2. 論文標題 書評：「民主主義のための『文化論』の探求：越智敏夫『政治にとって文化とはなにか 国家・民族・市民』(ミネルヴァ書房、2018年)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政治思想研究	6. 最初と最後の頁 404-405
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 關雄二	4. 巻 none
2. 論文標題 南米ペルー考古学との出会い：ナショナリズムを超えた文明史観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会」講演要旨集』	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NAGAOKA TOMOHITO, SEKI YUJI, LIVIA MAURO ORDOZUEZ, CHOCANO DANIEL MORALES	4. 巻 128
2. 論文標題 Depressed skull fracture at Pacopampa in the Peru's northern highlands in the Late Cajamarca Period	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 83~87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.2004061	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuji Seki and Daniel Saucedo Segami	4. 巻 2020(Supplementum II)
2. 論文標題 Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial para su uso y proteccion en la sierra norte del Peru	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Acta Hispanica, 2020(Supplementum II)	6. 最初と最後の頁 737-746
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 太田好信	4. 巻 40
2. 論文標題 夢から倫理へ：フィールドでの出会いにおいて何を託されたか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ研究年報	6. 最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junno Ari, Isaksson Sven, Hirasawa Yu, Kato Hirofumi, Jordan Peter D.	4. 巻 22
2. 論文標題 Evidence of increasing functional differentiation in pottery use among Late Holocene maritime foragers in northern Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Archaeological Research in Asia	6. 最初と最後の頁 100194 ~ 100194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ara.2020.100194	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 加藤博文	4. 巻 1
2. 論文標題 先住民考古学の成立背景と課題：アメリカ合衆国における事例考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アイヌ・先住民研究	6. 最初と最後の頁 121-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石垣直	4. 巻 24
2. 論文標題 現代台湾における原住民族教育政策：族語教育、部落学校、実験教育の事例を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 台湾原住民研究	6. 最初と最後の頁 163-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ikeda, M.	4. 巻 7
2. 論文標題 Repatriation of human remains and burial materials of Indigenous peoples: Who owns cultural heritage and dignity ?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CO*Design	6. 最初と最後の頁 1,16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/75574	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡崎洋三・池田光穂	4. 巻 6
2. 論文標題 本多勝一と山口昌男の噛み合わない論争：1970年の文化人類学と報道ジャーナリズム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CO*Design	6. 最初と最後の頁 13,32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/73010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Seguchi, Noriko	4. 巻 171
2. 論文標題 150 years of research on the origins of the Japanese: Colonialism and neo-colonialism	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 American Journal of Physical Anthropology	6. 最初と最後の頁 257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/ajpa.24023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 43
2. 論文標題 書評：『ロバート・フィルマーの政治思想』（古田拓也著、岩波書店、2018年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会思想史研究	6. 最初と最後の頁 142, 145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nagisa Nakagawa, Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva, Mauro Ordonez, Diana Aleman y Daniel Morales Chocano	4. 巻 1
2. 論文標題 El proceso del complejo arqueologico Pacopampa	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Actas del V Congreso Nacional de Arqueologia,	6. 最初と最後の頁 199, 209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nagisa Nakagawa, Juan Pablo Villanueva, Yuji Seki y Daniel Morales Chocano	4. 巻 2
2. 論文標題 La ceramica utilizada en el festin en Pacopampa durante el Periodo Formativo	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Actas del IV Congreso Nacional de Arqueologia	6. 最初と最後の頁 7, 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomohito Nagaoka, Mai Takigami, Yuji Seki, Kazuhiro Uzawa, Diana Aleman Paredes, Percy Santiago Andia Roldan, Daniel Morales Chocano	4. 巻 nd.
2. 論文標題 Bioarchaeological Evidence of Decapitation from Pacopampa in the Northern Peruvian Highlands ' PLOS ONE	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 nd.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NAGAOKA TOMOHITO, SEKI YUJI, HIDALGO JUAN PABLO VILLANUEVA, CHOCANO DANIEL MORALES	4. 巻 128
2. 論文標題 Bioarchaeology of human skeletons from an elite tomb at Pacopampa in Peru ' s northern highlands	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 11 ~ 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1537/ase.200218	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田好信	4. 巻 21
2. 論文標題 いま、ハヨピラの前に立ち、C B Aの活動について考えること 空飛ぶ円盤から「ポスト真実」まで	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 沙流川歴史館年報	6. 最初と最後の頁 19, 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田好信	4. 巻 84
2. 論文標題 書評「坂野徹（編）『帝国を調べる、植民地フィールドワークの科学史』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 112, 114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤博文	4. 巻 n.d.
2. 論文標題 環オホーツク文化という視座：山浦清先生を偲ぶ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 貝塚	6. 最初と最後の頁 23, 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤博文	4. 巻 936
2. 論文標題 アイヌ民族の歴史文化遺産の魅力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学土會会報	6. 最初と最後の頁 59, 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤博文	4. 巻 88
2. 論文標題 考古學中的去植民地化：北海道考古學的課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 原教界	6. 最初と最後の頁 85, 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石垣直	4. 巻 23
2. 論文標題 現代台湾における原住民政策の動向：黄論文主題の背景説明と現代台湾原住民社会理解への一助として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 台湾原住民研究	6. 最初と最後の頁 135, 138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tangiku Itsuji and Shinohara Chika	4. 巻 2019
2. 論文標題 Sound of Condolence in Nivkh Traditional Music	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SIMP Studia Instrumentorum Musicae Ppularis (New Series)	6. 最初と最後の頁 291, 300
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田聡・池田光穂	4. 巻 Vol. 2018-DC-111
2. 論文標題 ドキュメントコミュニケーションの4つのリデザイン：AI時代に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報処理学会研究報告 (IPSJ SIG Technical Report)	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 4
2. 論文標題 アートとコミュニケーション：芸術人類学へのもうひとつの入り口	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CO*Design	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/71351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 KATO Hirofumi	4. 巻 0
2. 論文標題 Hokkaido Sequences and the Archaeology of the Ainu	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Encyclopedia of Global Archaeology	6. 最初と最後の頁 0-0
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-319-51726-1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 69
2. 論文標題 コミュニティ再建と行為主体性:多文化主義の政策実践をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北大法学論	6. 最初と最後の頁 369-396
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuji Yasuo	4. 巻 9
2. 論文標題 Multiculturalism and the Policies of Community Rebuilding	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 OMNES: The Journal of Multicultural Society	6. 最初と最後の頁 1~33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14431/omnes.2019.01.9.1.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 69
2. 論文標題 後期近代におけるコミュニティ再建:多文化主義の政策実践の一側面	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北大法学論集	6. 最初と最後の頁 234-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎幸治	4. 巻 0
2. 論文標題 ハインリッヒ・フォン・シーボルトのアイヌ資料の調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 NEWS LETTER (国立歴史民俗博物館)	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎幸治	4. 巻 0
2. 論文標題 博物館学 (博物館プロジェクト/先住民族アート・プロジェクト報告)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アイヌ・先住民研究センターの10年 2007~2017』	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎幸治	4. 巻 0
2. 論文標題 現代に受けつがれるアイヌ狩猟文化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『キムンカムイとアイヌ 春夏秋冬』	6. 最初と最後の頁 146-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎幸治	4. 巻 0
2. 論文標題 アイヌ工芸と持続可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 DGs北海道の地域目標をつくろう2「SDGs×先住民族」	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹菊逸治	4. 巻 20
2. 論文標題 アイヌ語復興の新しい流れ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ことばと社会	6. 最初と最後の頁 164-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石垣直	4. 巻 40
2. 論文標題 現代台湾における原住民母語復興(3) : ブヌンの事例からみる教育現場の現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南方文化	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝 奈々子、池田 光穂	4. 巻 4
2. 論文標題 音と感覚のエスノグラフィー : マヤ・ケクチの民族音楽学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Co*Design 特別号	6. 最初と最後の頁 1~182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/85580	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻康夫	4. 巻 72(3)
2. 論文標題 アイヌ民族をめぐる「分断」と「連帯」 : 石原真衣『沈黙の自伝的民族誌』をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北大法学論集	6. 最初と最後の頁 227-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤 博文	4. 巻 1
2. 論文標題 先住民考古学の成立背景と課題：アメリカ合衆国における事例考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アイヌ・先住民研究	6. 最初と最後の頁 121～143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/97170	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤 博文	4. 巻 2
2. 論文標題 オーストラリアへ渡ったアイヌ民族の遺骨と小金井良精	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アイヌ・先住民研究	6. 最初と最後の頁 31～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/Jais.2.031	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細川弘明	4. 巻 50(2)
2. 論文標題 権利と尊厳の回復への長い道のり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境と公害	6. 最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計101件（うち招待講演 22件／うち国際学会 36件）

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 霊性と物質性の研究倫理：先住民が訴える遺骨副葬品返還運動
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会（主催校：早稲田大学）オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川義信・中岡成文・西村高宏・池田光穂、司会：山中浩司
2. 発表標題 シンポジウム「生きるための社会のデザインを考える」
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第46回大会、大阪大学人間科学部（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 先住民運動からみた日本の保守とリベラルの位相
3. 学会等名 第93回日本社会学会、オンライン開催、会場：権力・政治（司会：中澤秀雄）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 琉球人遺骨返還運動と文化人類学者の反省
3. 学会等名 日本平和学会2020年度秋季研究大会、オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 1878年にハインリッヒ・フォン・シーボルトが集めたアイヌ民具
3. 学会等名 (講演) 『北海道大学 アイヌ・先住民研究センター2020年度 前期公開講座』
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 アイヌ工芸を堪能する
3. 学会等名 (講演) 『特別展「アイヌの美しき手仕事」記念オンライン講座』主催：日本民藝館。於：オンライン(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 木彫り熊をめぐる アイヌ文化と北海道観光
3. 学会等名 (講演) 『帯広百年記念館博物館講座・北大アイヌ・先住民研究センター巡回講座』主催(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 瀬口典子
2. 発表標題 「人種優劣」と植民地主義につながった自然人類学と遺骨返還問題
3. 学会等名 大阪大学C0デザインセンター主催第24回(通算194回)研究会(世直し研究会)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 瀬口典子
2. 発表標題 遺骨返還運動と先住民コミュニティから学ぶ：調査する側とされる側の相互関係
3. 学会等名 第12回 人骨問題を考える公開学習会@京都大学(Zoom開催)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 辻康夫
2. 発表標題 マイノリティ言語の地位をめぐる考察
3. 学会等名 日本解放社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 關雄二
2. 発表標題 アンデス考古学の視点から
3. 学会等名 鳥居龍蔵生誕150周年記念 国際シンポジウム「鳥居龍蔵と現代社会 - その学問と資料の意義を問う - 」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Daniel D. Saucedo Segami, Yuji Seki
2. 発表標題 A Bridge between the Past and the Present: Cultural Heritage as a Mean to Build Social Memory in Peru
3. 学会等名 連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ 集合的健忘に抗するための文化伝達 第4回 学術活動をとおした継承」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 關雄二
2. 発表標題 科学分析から見たアンデス文明初期の神殿の変貌
3. 学会等名 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」オンライン・シンポジウム世界の古代文明をめぐる最新調査研究
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuji Seki
2. 発表標題 Repensando el impacto cultural de la sierra norte en la costa norte peruana durante la epoca prehispanica
3. 学会等名 Arqueologia del valle de Lambayeque
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 關雄二
2. 発表標題 会的記憶と無形遺産の導入 南米ペルー高地での有形遺産保護の試み
3. 学会等名 令和2年度文化財行政講座 文化庁（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 關雄二
2. 発表標題 権力分析の異なる位相 - アンデス文明初期における威信財と社会的記憶 -
3. 学会等名 シンポジウム「社会進化の比較考古学」実行委員会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuji Seki, Daniel Morales, Juan Pablo Villanueva, Diana Aleman, Mauro Ordonez
2. 発表標題 Pacopampa: 14 anos de investigacion y conservacion del centro ceremonial formativo
3. 学会等名 Ciclo de conferencias magistrales Tema: Arquitectura Monumental Prehispanica (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 知の倫理、そして先住民研究形成に向けて：遺骨返還運動に相對する「脱植民地化世代」
3. 学会等名 「学知の植民地主義を考える」（主催：琉球遺骨返還請求訴訟支援全国連絡会）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 なぜ、遺骨返還要求と向き合うことが大切か：プレゼンティズム (presentism) の限界と可能性
3. 学会等名 日本平和学会秋季研究大会（オンライン）分科会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太田好信、池田光穂、瀬口典子、辻康夫
2. 発表標題 琉球人骨問題に関する対話
3. 学会等名 シンポジウム「琉球人骨問題に関する対話」中頭郡中城村・吉の浦会館
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤博文
2. 発表標題 先住民研究としてのアイヌ研究へ向けて
3. 学会等名 北海道大学アイヌ・先住民研究センター・国立アイヌ民族博物館共催シンポジウム『アイヌ文化の教育と人材育成』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤博文
2. 発表標題 アイヌ民族史の課題と展望：先住民族史の創成へ向けて
3. 学会等名 『アイヌ文化フェスティバル』
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石垣直
2. 発表標題 台湾原住民実験学校における民族文化教育の取り組み
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ikeda, Mitsuho
2. 発表標題 Repatriation of human remains and burial materials: Who owns cultural heritage and dignity?
3. 学会等名 The Spring meeting of the Korean Society of Cultural Anthropology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡秀明、池田光穂
2. 発表標題 「病いの語り」としての短歌と「植地的想像力」：第二次世界大戦の終戦までのその政治性をめぐって
3. 学会等名 第45回日本保健医療社会学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikeda, Mitsuho and Skooja Suh
2. 発表標題 On Japanization Process of Introduction to Harm Reduction Policy: From 1970s to Present
3. 学会等名 第45回日本保健医療社会学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikeda, Mitsuho
2. 発表標題 Spirituality and Materiality among Human Remains--Reflection from repatriation activism of the Ainu and the Ryukyu
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikeda, Mitsuho
2. 発表標題 Stealing remains is criminal": Ethical, Legal, and Social Issues of the Repatriation of Remains to Ryukyu Islands, southern Japan
3. 学会等名 Annual Meeting of American Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 霊性と物質性：アイヌと琉球の遺骨副葬品返還運動から
3. 学会等名 第三回豊中地区研究交流会（大阪大学基礎工学部シグマホール）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamasaki, Koji
2. 発表標題 Call and Response in Museum: Case Study of Ainu Material Culture
3. 学会等名 Call and Response in Indigenous Research Cases from Australia and Japan.by JSPS
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yamasaki, Koji
2. 発表標題 Building New Research Networks among the Ainu Collections in North America .
3. 学会等名 American Anthropological Association Annual meeting. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 アイヌ民族資料とデータベース:調査研究の現場から
3. 学会等名 『民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討:データベースとその活用』(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 アイヌ文化と観光土産 展示実践がもたらす多様な再文脈化
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Seguchi, Noriko
2. 発表標題 Repatriation of Ainu remains and the responsibilities of Japanese Physical anthropology: What are our real contributions to the Ainu community?
3. 学会等名 Annual Meeting of American Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻康夫
2. 発表標題 本質主義批判をふまえた多文化主義政策の可能性
3. 学会等名 日本解放社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuji Seki y Daniel Saucedo Segami
2. 発表標題 Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial par su uso y proteccion en la sierra norte del Peru
3. 学会等名 XIX Congreso de la FIEALC (Federacion Internacional de Estudios sobre America Latina y el Caribe) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva y Daniel Morales
2. 発表標題 Pacopampa: Arquitectura y poder en el periodo Formativo de la sierra norte del Peru
3. 学会等名 Simposio Internacional CHAVIN: 100 anos de arqueologia desde Julil C. Tello hasta nuestros dias. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva, Diana Aleman, Mauro Ordonez y Daniel Morales
2. 発表標題 Las investigaciones y el uso social del sitio arqueologico Pacopampa
3. 学会等名 VI Congreso Nacional de Arqueologia, Simposio por el de amistad entre Japon y Peru (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 夢から倫理へ フィールドでの出会いにおいて何を託されたのか
3. 学会等名 第40回日本ラテンアメリカ学会定期研究大会記念シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 遺骨を語ることは 歴史への反省から生じる学問の倫理
3. 学会等名 日本人類学会第72 回大会分科会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KATO Hirofumi,
2. 発表標題 What We Should Do, What We Can Do
3. 学会等名 Annual Meeting of American Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KATO Hirofumi
2. 発表標題 Indigenous Repatriation in Japan and Guideline of Research Ethics in the Field of Ainu Studies
3. 学会等名 JSPS Core to Core workshop Indigenous Repatriation and Heritage Issues in Uppsala (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KATO Hirofumi, Maa-ling CHEN, Chung-Yu LIU, Gabriel HUGES
2. 発表標題 Send-off ceremony of Abalone of the historical Ainu: a case study at Hamanaka 2 site, Rebun, Hokkaido
3. 学会等名 The 2nd International Symposium "Pacific Archaeology: Technologies, migrations, adaptations and material culture in the ancient time (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石垣直
2. 発表標題 多言語・多文化社会としての台湾における原住民言語・文化継承の取り組み
3. 学会等名 沖縄県立博物館・美術館 2019年度企画展「台湾：黒潮でつながる隣ジマ」関連開催座談会「台湾の過去と現在、未来をみつめて」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹菊逸治・篠原智花
2. 発表標題 Sound of condolence in Nivkh traditional music
3. 学会等名 22nd Symposium of the ICTM Study Group on Musical Instruments (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OTA, Yoshinobu
2. 発表標題 Toward the Ethics of Listening to the Voice of the Other: Learning from Ainu Struggles for Repatriating Human Remains
3. 学会等名 Annual Meeting of American Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 身体概念を組み換える
3. 学会等名 第44回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 民俗学とプラグマティックな医学について
3. 学会等名 近畿民俗学会平成30年度総会・研究集会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 日本における科学技術政策の人類学:科学技術基本法以降の大学と研究開発(R&D)
3. 学会等名 第52回日本文化人類学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuho IKEDA and Hideaki MATSUOKA
2. 発表標題 Lepers, Nation-State, and Empress Dowager: A Prolegomena to medical anthropology of bio-power governmentality
3. 学会等名 the 60th annual meeting of the Korean Society of Cultural Anthropology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuho Ikeda
2. 発表標題 The Mayan Traditional Medicine: Theories and Ethics
3. 学会等名 The VIII-th FRENCH-JAPANESE INTERNATIONAL BIOETHICS CONFERENCE, (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 医療やケアのグローバル化に伴うコミュニケーションの問題をあぶりだす
3. 学会等名 第10回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 学生と教職員がともにつくる研究倫理教育の可能性について
3. 学会等名 平成30年度IDE大学協会九州支部第50回セミナー (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sookja SUH and Mitsuho IKEDA
2. 発表標題 How has the Concept of Harm Reduction been introduced and interpreted in Japan?
3. 学会等名 The 20th International Society of Addiction Medicine Annual Meeting BUSAN 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuho IKEDA and Sookja SUH
2. 発表標題 Introducing and Interpreting of Concepts of Harm Reduction in modern Japan
3. 学会等名 The 3rd Interinstitutional academic meeting in Toyonaka Campus 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 臓器移植における文化概念を使った「抵抗」の隆盛と挫折そして再生について
3. 学会等名 第30回日本生命倫理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 PBL (問題解決型学習) を目指した英語教材開発
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 関西支部・2018年度第3回支部講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshinobu Ota
2. 発表標題 “Unpacking Meanings of “Coming Home.” Presented as part of the panel entitled “Indigenous Studies at the Crossroads of Globalization and Settler Colonialism”
3. 学会等名 the Fourth World Social Science Forum (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 遺骨を語ることは 歴史への反省から生じる学問の倫理
3. 学会等名 第72回 日本人類学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瀬口典子
2. 発表標題 先住民遺骨が投げかける問題と人類学の未来：アメリカの事例と日本
3. 学会等名 第72回日本人類学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Seguchi N.
2. 発表標題 The controversies surrounding Ainu skeletal remains, indigenous rights, and research ethics. Center for Japanese Studies
3. 学会等名 Center for Japanese studies and Department of Anthropology. (招待講演)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Seguchi N.
2 . 発表標題 The controversies surrounding Ainu skeletal remains-Overview
3 . 学会等名 Open Forum at Law School at University of Hawaii, Manoa (招待講演)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Seguchi N.
2 . 発表標題 The repatriation of Ainu skeletal remains and ethical considerations: Can Japanese physical anthropologists work with descendant communities?
3 . 学会等名 Department of Sociology and Anthropology, Montana State University, Bozeman, (招待講演)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 KATO Hirofumi
2 . 発表標題 Collections of Ainu human remains and reburial debates in Japan: Current Situation and Challenges
3 . 学会等名 The Workshop: The Network for human remains in museums and university collections, Gustavianum, Uppsala University (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 KATO Hirofumi
2 . 発表標題 Decolonization and Indigenous Archaeology
3 . 学会等名 World Social Science Forum 2018 in Fukuoka (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 KATO Hirofumi
2. 発表標題 Archaeology, Research Ethics and the Ainu: Understanding the Indigenous Past
3. 学会等名 CHAGS 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KATO Hirofumi
2. 発表標題 Archaeology and Cultural Property for the Ainu in Japan
3. 学会等名 European Workshop International Studies in 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤博文
2. 発表標題 スカンディナヴィア諸国におけるサーミ遺骨返還の動向：返還と国ごとのガイドライン作り
3. 学会等名 日本学術会議 地域研究委員会歴史的遺物返還に関する検討会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤博文
2. 発表標題 歴史的遺物返還と北大の取り組み
3. 学会等名 日本学術会議 地域研究委員会歴史的遺物返還に関する検討会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuo Tsuji
2. 発表標題 Multiculturalism and revitalization of diminished culture
3. 学会等名 World Social Science Forum 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻康夫
2. 発表標題 『近代政治原理』と『神学的パラダイム』の間：加藤節『ジョン・ロック：神と人間との間』を読む
3. 学会等名 成蹊大学・思想史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuo Tsuji
2. 発表標題 Multiculturalism and the Policy of Community Rebuilding
3. 学会等名 International Political Science Association, 25th World Congress of Political Science (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koji YAMASAKI
2. 発表標題 Recent trends in Ainu craft and intellectual property
3. 学会等名 Workshop "Identifying Challenges and Potential Solutions in Protecting Indigenous Heritage in Japan and North America" (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 アイヌ民俗文化財の活用について考える
3. 学会等名 アイヌ民俗文化財伝承・活用事業総合講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 アイヌ民俗文化財伝承・活用事業総合講座
3. 学会等名 キムンカムイとアイヌ 春夏秋冬、展示資料について（ギャラリートーク）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 博物館活動におけるアイヌ民族との協働
3. 学会等名 南山大学人類学研究所 公開シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koji YAMASAKI
2. 発表標題 Indigenous cultures and tourism: Ainu as a case study
3. 学会等名 “Sustainability is Cool in Arctic Tourism” Ministry of Economic Affairs and Employment of Finland. (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 モノから考えるアイヌ文化
3. 学会等名 北海道大学アイヌ・先住民研究センター巡回講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹菊逸治
2. 発表標題 さあ、参加して学ぼう！：山本多助はポロナイスクで何を見たか
3. 学会等名 第二回ロシア連邦極東先住民民族言語による国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹菊逸治
2. 発表標題 個人の活動にもとづいたアイヌ語復興運動
3. 学会等名 台湾・中央大学客家学院シンポジウム「客家語及びマイノリティ言語の復興」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹菊逸治
2. 発表標題 アイヌ伝統文学とアイヌ現代文学
3. 学会等名 台湾原住民族文学国際シンポジウム「和而不同」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹菊逸治
2. 発表標題 ジャングルとアイヌ叙事詩ユカラ
3. 学会等名 国際シンポジウム「世界の叙事詩とジャングル」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹菊逸治
2. 発表標題 アイヌ語と北方諸言語の言語接触
3. 学会等名 国際シンポジウム「日本と北東アジア地域の危機言語へのアプローチ：文法記述・記録・再活性化」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丹菊逸治
2. 発表標題 「いつの間宮海峡を渡ったのか～アイヌ叙事詩ユカラとモンゴル叙事詩ジャングル」
3. 学会等名 国際口承文芸学会国際研究大会2018(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石垣直
2. 発表標題 「歴史認識」への接近と展開の可能性：日本の植民地統治に関わる台湾原住民の諸事例から見えてくるもの
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 ハインリッヒ・フォン・シーボルトのアイヌ・コレクション：コレクション研究の視点から
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yamasaki, Koji
2. 発表標題 Call and Response in Museum: Case Study of Ainu Material Culture
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS 12). Panel: Call and Response in Indigenous Research: Cases from Japan and Australia. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 アイヌのくらしと民具
3. 学会等名 アイヌ文化フェスティバル2021 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎幸治
2. 発表標題 交差する記録 ハインリッヒの北海道調査を中心に
3. 学会等名 (国際シンポ) ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション さらなる洞察 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ishigaki, Naoki
2. 発表標題 A Local Education Program in Contemporary Okinawa and Its Improvement: From the perspective of “Indigenous Education”
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars(ICAS12) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 KATO Hirofumi
2. 発表標題 The History of the Ainu in the Global context
3. 学会等名 『歴史学・考古学・遺伝学から語る古代東アジアの歴史文化』(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 KATO Hirofumi
2. 発表標題 Indigenous Repatriation: Case in Japan and Current Issues
3. 学会等名 ANU 2021: Introduction to Repatriation: principles, policy, practice, Australian National University (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤博文
2. 発表標題 先住民研究のボーダーレス化への取組み
3. 学会等名 第14届台日原住民族研究論壇(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瀬口典子
2. 発表標題 遺骨返還運動から学ぶ先住民コミュニティとともに歩む人類学：研究する側と研究される側の相互的関係の再構築
3. 学会等名 第55回日本文化人類学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 文化人類学から遺骨返還運動への返礼：対話性 (dialogism) の再創造にむけて
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 太田好信
2. 発表標題 文化人類学はポストコロニアルになれるのか
3. 学会等名 平和学会秋季研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tuji, Yasuo
2. 発表標題 Reconsidering the culturalist approach of multiculturalism: Focusing on the policy issue of language preservation
3. 学会等名 International Political Science Association, The 26th World Congress of Political Science (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井上大介・池田光穂
2. 発表標題 口ノトボスとしてのラテンアメリカ：地域研究から「ラテンアメリカらしさ」のエスノグラフィーへ
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 「学問の暴力」という糾弾がわれわれに向けられるとき：遺骨返還運動と日本文化人類学
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 分析哲学に「検閲」の文字なし：芸術と社会の係留点に関する社会学的考察
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 細川弘明
2. 発表標題 核の河の岸辺の出来事としての原発事故
3. 学会等名 オーストラリア学会2021年度全国研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計26件

1. 著者名 山中 浩司、石蔵 文信、中道 正之、中山 康雄、池田 光穂、斉藤 弥生、野村 晴夫、モハーチ・ゲルゲイ、野島 那津子、平井 啓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 242
3. 書名 病む	

1. 著者名 池田光穂、山福朱実	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 368
3. 書名 暴力の政治民族誌	

1. 著者名 松島 泰勝、山内 小夜子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 耕文社	5. 総ページ数 256
3. 書名 京大よ、還せ	

1. 著者名 日高 薫、ベッティーナ・ツォルン、人間文化研究機構国立歴史民俗博物館	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 322
3. 書名 異文化を伝えた人々	

1. 著者名 別冊太陽編集部	4. 発行年 2020年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 160
3. 書名 アイヌをもっと知る図鑑	

1. 著者名 ラテンアメリカ文化事典編集委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 780
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

1. 著者名 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館、鳥居龍蔵を語る会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 578
3. 書名 鳥居龍蔵の学問と世界	

1. 著者名 常木晃先生退職記念論文集編集委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 578
3. 書名 世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地	

1. 著者名 辻康夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 社会科学文献出版社（北京市）	5. 総ページ数 351
3. 書名 日本哲学と思想研究 2017	

1. 著者名 Richard L. Burger, Lucy C. Salazar, and Yuji Seki (eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 New Haven: Yale University Department of Anthropology and the Yale Peabody Museum of Natural History	5. 総ページ数 234
3. 書名 Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC	

1. 著者名 国立歴史民俗博物館、松木 武彦、福永 伸哉、佐々木 憲一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 280
3. 書名 日本の古墳はなぜ巨大なのか	

1. 著者名 白坂 蕃、稲垣 勉、小沢 健市、古賀 学、山下 晋司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 464
3. 書名 観光の事典	

1. 著者名 常木晃先生退職記念論文集編集委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 578
3. 書名 世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地	

1. 著者名 久部良和子編集担当	4. 発行年 2019年
2. 出版社 沖縄県立博物館・美術館	5. 総ページ数 87
3. 書名 台湾：黒潮でつながる隣（とっない）ジマ：2019年企画展ガイドブック	

1. 著者名 ナジェジダ・タンジナ口述；丹菊逸治編訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道大学アイヌ・先住民研究センター	5. 総ページ数 59
3. 書名 ナジェジダ・タンジナ伝承集（ロシア語）	

1. 著者名 丹菊逸治	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北海道大学アイヌ・先住民研究センター	5. 総ページ数 127
3. 書名 アイヌ韻文の行頭韻	

1. 著者名 岡和田晃編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代北海道文学論 来るべき「惑星思考」に向けて	5. 総ページ数 210
3. 書名 藤田印刷エクセレントブックス	

1. 著者名 森 淑江、山田 智恵里、正木 治恵	4. 発行年 2019年
2. 出版社 南江堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 国際看護	

1. 著者名 岸上 伸啓	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 336
3. 書名 はじめて学ぶ文化人類学	

1. 著者名 加藤 博文、若園 雄志郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 168
3. 書名 いま学ぶ アイヌ民族の歴史	

1. 著者名 丹菊逸治	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北海道大学アイヌ・先住民研究センター	5. 総ページ数 283
3. 書名 アイヌ叙景詩鑑賞 : 押韻法を中心に	

1. 著者名 深山直子、丸山淳子、木村真希子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 先住民からみる現代世界	

1. 著者名 窪田新一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 272
3. 書名 モンゴルはどこへ行く	

1. 著者名 関 雄二、山本 睦、松本 雄一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 392
3. 書名 アンデス文明ハンドブック	

1. 著者名 丹菊逸治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北海道大学アイヌ・先住民研究センター	5. 総ページ数 312
3. 書名 アイヌ韻文の朗唱法	

1. 著者名 山崎幸治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京美術	5. 総ページ数 80
3. 書名 もっと知りたいアイヌの美術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>金関丈夫と琉球の人骨（短縮URL以下同様）：https://bit.ly/3KbZPeU 琉球遺骨返還運動にみる倫理的・法的・社会的連累：https://bit.ly/3kloldA 遺骨や副葬品を取り戻しつつある先住民のための試論：https://bit.ly/3Ll6LHT 霊性と物質性：アイヌと琉球の遺骨副葬品返還運動から：https://bit.ly/3veGjJp 篠田謙一博士の「研究ために人骨資料が必要」という修辞の分析：https://bit.ly/3kJS5Xq アイヌ遺骨等返還の手続きについて考えるページ：https://bit.ly/3wbAuge 個人が特定されないアイヌ遺骨等の地域返還手続きに関するガイドライン(案)：https://bit.ly/3KQ5wzL 先住民遺骨副葬品返還の研究倫理：https://bit.ly/3shu0eK アイヌ遺骨等返還の研究倫理：https://bit.ly/3P51RBe 遺骨は自らの帰還を訴えることができるのか？：https://bit.ly/3xSYjw6 琉球人遺骨返還運動と文化人類学者の反省：https://bit.ly/37Cg4Ev</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 幸治 (Yamasaki Koji) (10451395)	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授 (10101)	削除：2021年6月28日

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	瀬口 典子 (Seguchi Noriko) (10642093)	九州大学・比較社会文化研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	辻 康夫 (Tsuji Yasuo) (20197685)	北海道大学・法学研究科・教授 (10101)	削除：2021年6月28日
研究分担者	關 雄二 (Sekai Yuji) (50163093)	国立民族学博物館・人類文明誌研究部・名誉教授 (64401)	削除：2021年6月28日
研究分担者	太田 好信 (Ota Yoshinobu) (60203808)	九州大学・比較社会文化研究院・特任研究者（名誉教授） (17102)	削除：2021年6月28日
研究分担者	加藤 博文 (Kato Hirofumi) (60333580)	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・教授 (10101)	削除：2021年6月28日
研究分担者	石垣 直 (Ishigaki Naoki) (60582153)	沖縄国際大学・総合文化学部・教授 (38001)	削除：2021年6月28日
研究分担者	細川 弘明 (Hosokawa Komei) (70165554)	京都精華大学・人文学部・名誉教授 (34317)	削除：2020年3月18日
研究分担者	丹菊 逸治 (Tangiku Itzujii) (80397009)	北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授 (10101)	削除：2021年6月28日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------